



風水害への備え

台風や集中豪雨では強風や激しい雨により、時として家屋への浸水、河川の氾濫、土砂災害など様々な被害が想定されます。風水害に備えて日頃の安全対策をしっかりと行いましょう。

自宅の風水害対策チェック

☑️ 自宅をチェックしてみましょう!

チェック 1

屋根材がめくれたり、はがれたりしていませんか?

チェック 2

アンテナは錆びたりゆるんだりしていませんか?

チェック 3

窓や網戸のがたつきはありませんか?

チェック 4

風で飛ばされそうな庭木はありませんか?

チェック 5

プロパンガスボンベは、しっかりと固定されていますか? 配管はぐらついていませんか?

チェック 6

壁の腐食・浮き・亀裂はありませんか?

チェック 7

フェンスやブロック塀はぐらついていませんか? ひび割れや破損はしていませんか?

チェック 8

風で飛ばされそうな物(自転車や植木鉢等)を外に置きっぱなしにしていませんか?

雨と風による危険度



雨の強さと降り方

やや強い雨	強い雨	激しい雨	非常に激しい雨	猛烈な雨
1時間に10~20mm未満	1時間に20~30mm未満	1時間に30~50mm未満	1時間に50~80mm未満	1時間に80mm以上の雨
ザーザーと降る雨。地面一面に水たまりができ、地面からの跳ね返りで足元が濡れ、雨の音で話し声が聞き取りにくくなります。	どしゃ降り。傘をさしていても濡れてしまうほどの雨で、側溝や下水、小さな川があふれ、小規模のがけ崩れなどの心配があります。	バケツをひっくり返したような雨。道路が川のようになり、山崩れ・がけ崩れが起きやすくなります。危険地帯では避難の準備が必要になります。	滝のようにゴーゴーと降る雨。河川の氾濫をはじめ、土石流などが起きやすく、多くの災害が発生するおそれがあります。車の運転も危険です。	息苦しくなるような圧迫感のある雨。恐怖を感じる雨。雨による大規模災害が発生するおそれが強く、厳重な警戒が必要となります。



風の強さと吹き方

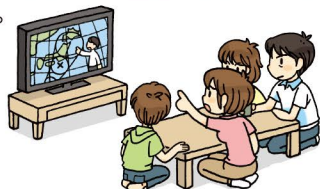
※風速は10分間の平均風速です。最大瞬間風速は平均風速の約1.5倍~3倍以上になることがあります。

やや強い風	強い風	非常に強い風	猛烈な風
風速10~15m/s	風速15~20m/s	風速20~25m/s	風速30m/s以上
風に向かって歩きにくくなり、樹木全体や電線が揺れ始めます。高速運転時は横風に流される感覚を受けます。	風に向かって歩けなくなり、転倒する人も出ます。看板やトン板が外れ始め、高所での作業は極めて危険です。	何かにつかまっていないと立ってられません。通常速度による運転が困難になり、飛来物による負傷にも注意しましょう。	屋外での行動は極めて危険です。多くの樹木が倒れ、走行中のトラックが横転したり、倒壊する住宅も出てきます。

大雨時は早期の避難を！！

最新情報を常にチェック

台風や突然の豪雨等が発生した場合、進路予測や被害予想のより正確な情報をテレビ・ラジオ・インターネット等(5ページ参照)で収集しましょう。また、いつ起こっても対応できるように避難準備をしておきましょう。



浸水が始まる前に避難

自分が住んでいる地域や近くの川の上流で、豪雨や長雨が続けている場合は要注意です。特に、高齢者や障がいのある方など避難に時間がかかる方は、早めに避難することが大切です。



暗くなる前に避難

大雨が予想されるときは、明るいうちに避難しましょう。暗くなってからの避難は視界も悪く、陥没している道路や側溝などに気づかない場合があります。



分散逃避で「密」をさける

危険性が高い場所にいる場合

避難① 立ち退き避難

指定緊急避難場所・避難所

危険なときは迷わずに指定の緊急避難場所や避難所へ避難しましょう。



分散避難

安全な場所にある知人宅や宿泊施設などへ避難。



危険性が低い場所にいる場合

避難② 屋内安全確保

在宅避難

避難は立ち退き避難が基本ですが、自宅が避難の及ばない安全な場合のみ可能になります。



避難所が過密状態にならないために、「避難所」への避難以外に、「親戚・知人宅」、「ホテルなどの宿泊施設」「車両避難(車中泊)」、「在宅避難」などさまざまな避難先に、分散して避難することが大切です。

避難のとき注意すること

避難時の服装

荷物は少なく、動きやすい服装で避難しましょう。

ヘルメットや帽子、防災頭巾などで頭を保護

濡れても安心な服装

靴は底が厚く紐で締められる運動靴を!



非常持ち出し袋は両手が使えるリュックがオススメ

軍手や革手袋などで手を保護

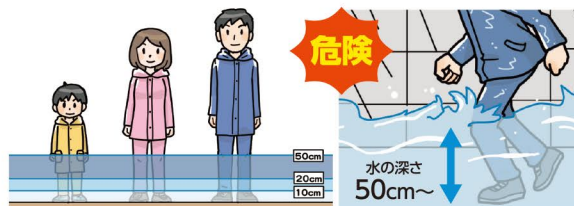


避難前にすること

家を出る前にブレーカーを落とし、ガスの元栓を閉めるなど火の元を確認しましょう。また、家族や知人などに避難することを連絡しておきましょう。

歩ける深さに注意!

歩行可能な水深の目安は、ひざ下くらい(約50cm)までです。水深が腰まであったり、浅くても水の流れが速い場合は無理をせず、高い場所(2階以上)に避難し救助を待ちましょう。



※流れが速いと約20cmの深さでも危険です!

足もとに要注意!

道路が浸水していた場合、水面下は水が濁っているため、どんな危険が潜んでいるかわかりません。長い棒や傘などを杖代わりにして水中の安全を確認めながら進みましょう。

